

夏月と藏玉いへり、林鐘と年中行事秘抄みえたるは律名にして、禮記月令、史記律書、淮南子、時則訓、春秋元命苞、白虎通等に見えたり。

〔日本書紀神武〕戊午年六月イナツキ

〔日本書紀通證神武〕六月イナツキ水月也、言田皆引イナツキ苗代水也、

〔古今和歌集三〕みな月つごもりの日よめる

〔秘藏抄上〕十二月異名 六月みな月略○中 すす、くれ月○頭書云、彌涼暮月

〔莫傳抄〕十二月異名 涼暮月 松風月 六月

〔藏玉和詞集〕十二月異名略○中 六鶉夏 風待月 鳴電月 常夏月

〔伊呂波字類抄天象〕七月○律中夷則

〔八雲御抄三節上〕七月 ふづき本はふむ月なり

〔下學集上〕夷則七月 文月此月七夕諸人以詩歌之文獻於二親月此月諸人詣親墳星或晒書篇以供星故云文月也

〔二中歷五時〕月倭名 七月俗説云、七月七夕、俗人稱借與織女、今披書於庭戸、故稱此月爲書披月、今所謂フミツキハ、是フミヒロケツキノ略也

〔興義抄上末〕七月イナツキ 七日たなばたにかすとて、ふみごもをひらくゆゑに、ふみつきといふをあやまれり、

やまれり、

〔語意考〕七月を布美月といふは、保布ホフ々美月イの上下を略きいふ也、稻は七月に穂を含めり、萬葉にふくむをば布々萬里と云を、布々と略き、又ほとのみいへり、かの春の二月三月は草木の萌茂るもていひ、秋三月は、稻もていふ也、

〔倭訓栞前編二十六〕ふみづき 七月をいふ、穗見月の義なるべし、小苗月、水月、穗見月と次第し、稻

穂の出をむるをいふ也、物にふづきともいふは略語也、藏玉集にふみひろげ月と見えたり、

〔古今要覽稿時令〕ふづき 七月 ふづきは七月の和名なり、ふみづきともいへり、さて此名目のは

みつね○歌